

昭和39年1月20日発行

— も く じ —

△全日本国語教育協議会に参加して

加納中学校 大野正行

△聞くこと話すことの指導に教科書教材
をどのように活用するか

中部中学校 木村康男

△プログラム学習から何を学んだか

加納中学校 片山利秋

△事務局だより、あとがき

岐阜県中学校

国語科研究会

会報6

全日本国語教育協議会

に参加して

加納中学校 大野正行

こととして十六回目を迎える全日本国語教育協議会は本年も九月二十二日(土)二十三日(日)の両日、東京日比谷高校を主会場として開かれた。参加者は約八百名、小、中、高の現場の教師、それに大学・研究所などの知名の国語学者で、これらの人々が一堂に会するということは実に盛観であった。

会は第一日、午前に講演・協議、午后に研究授業討論、第二日は午前講演・協議、午後分科会・講演というように日程が組まれていた。盛りたくさんな内容で、有意義な講演や、貴重な研究発表が数多かつたが、そのすべてを紹介することは困難であるので、そのうちのいくつかを取りあげて報告に代えたいと思う。

◎ 講演

国語教育の進路

(要旨) 渡辺茂氏 (会長)

一、現在の方向は、国語教育の近代化、即ち技術水準の向上という形で進行している。今の段階は、アメリカ化、機械化という形である。

二、この場合輿水実氏の理論が国語では有力な手がかりを与えている。(以下輿水理論の紹介)

氏は、「国語教育の精神と方向」で、「教師児童が人間的に、人格的に尊敬され、開放されなければならぬ」と説く。即ち人格的接触の重視のために近代化を計るといふのだ。ここから出発して、氏は、

・自分たちでできることは自分でさせる。そのために学習を留意してやる。

・近代化の方向は基本的に、学習の科学化・技術化・機械化・経済化・能率化である。そのために、自学自習を重んじ、目標をしぼっていく必要がある。(これがスキル主張の根拠である)

三、結び。輿水氏の理論を紹介したのは、自分として、これが現在の方向と思うからで

ある。

渡辺氏の講演は主体的でないといえるかも知れないが、会の方向を示唆したものであった。ついで、

第一協議 国語教育の近代化とは何か

基調講演 (要旨) 林 四郎氏 (国研)

ことばによる人間形成とは何か。

国語教育の目標は単に内容を読み取るということではない。ことばを使う人間、即ち、言語人格の完成をめざすものである。

これは、情意性と論理性、ことばとことがらのそれぞれが調和を保って発達するように、環境や作品を通じて行なうことである。人間はこの四つのバランスの程度によっていくつかの型に分けることができるのであるが、調和ある発達のために、欠陥の診断と矯正が必要である。

・科学化という場合には① \bar{r} だれでも \bar{r} (一般的)の面と② \bar{r} われでなくては \bar{r} (個別的・特殊的)の面とを分けて考え、① \bar{r} だれでも \bar{r} の面をできるだけ詳細に点数化していくことに重点がある。 \bar{r} われでなくては \bar{r} の面というのは、作文における児童・生徒の考え方に対する批評といったものである。
林氏の発表の中で、言語人格の図式的説明は興味深いものであった。

研究発表では大村はま氏(中)「討議の学習の基礎」はとかくおろそかになり勝ちな討議学習の進め方を段階的に計画化したものであった。討議学習の段階を①準備②基礎的技能練習③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

題目例に分け、各指導の順序や具体例を示したものである。

A 指導者の問いについて

- 1 二人で相談し
- 2 グループで
- (1) Bさんは・・・という。(2) 私は・・・と考える。
- (3) わたしたちは・・・と考える。(4) (くさんが・・・と言ったことから)私は・・・と考える。」

また討議題目例として

A (初歩) 書いたことの中からよいものを選ぶ。副題のよいものを選ぶ。・・・ B 文末表記のちがい。作文の修正。・・・ C 学習計画の相談。・・・ D 作品の主題。・・・ というようである。

討議のあと、西尾実氏が、国語教育の近代化について、これを否定はしないけれども、現在まで積み上げてきた国語教育の成果を否定するような、伝統を重視した国語教育の近代化は国語教育の精神を殺すもので、国語教育を進めるものではないと力説された。これはきわめて印象的であった。

研究授業は小・中・高に各会場が分散されたので、中学校を參觀した。会場は麹町中学校、二年「扇の的」(光村本) 授業者は武田政一氏であった。単元「古典にふれて」の中の一教材で、「古典への態度、表現の特色、助動詞の働き」を目標とした授業で、その展開部分は、

- 1 調べたこと(係り結びの語句の用法)の発表・補説。
- 2 新平家との関連、
- 3 語句の理解、
- 4 リズムについて話し合い、
- 5 表現の上の特色を調べる

といったふうに進められ、係り結びの引用一覧表、平曲のレコードが利用され、原文の美を味わう中から古典に親しませたいという努力が見られた。

このあと関連発表では、「古典入門であると同時に一応の完結性を持たせるべきで、生徒がその古典から人性の指針を得るよう

にしなければならぬ」（長田和雄氏）という意見、「古典教材としては、①ユーモアのある親しみ易い作品、②短かい文章、③引かれるもの、即ち高い思想性があり、あこがれと古人に対する尊敬の念を持つようなものでありたい」（上甲幹一氏）という意見、その他、「読む中で語感にひたらせるべきだ。」「ことばは重点的に、例えば本授業の場合、〃浮きぬ沈みぬゆられければ〃などが適当ではないか」など、中には授業に活発さを欠くという辛らつな意見も出された。最後に石井庄司氏がまとめとして、近代化には時間をかけよう、ということとで終った。

第二日も講演から始まった。

講演 現代の国語教育（要旨） 倉沢栄吉氏

一、現代の言語生活は集落化（同じような教育・知能程度の者の集まり化）していく傾向にある。

したがって、聞くこと・話すことに、思いやり・誠実さ・責任感・実践力が期待されねばならぬ。

二、教育は地味な時間のかかる仕事である。

思考力を伸ばすという名のもとに天才を育成するのであってはならない。すそ野を広げる仕事、例えば誰にでも文章が書けるといった仕事をしなければならぬ。

三、評価における選択方法は四肢選択がもっともよい。

速断できない微妙なちがいを思い出し、それに確信を持つて答え得るように作成することが必要である。

四、文学教育を一般化する方法を考える。

言語教育はいわば底上げの教育であり、文学教育はその基礎の上に立つ特殊なものであるが、それを一般化する方法を考える必要がある。

五、国語教師は教室へ何をもって臨むべきか。

教師の頭にカリキュラム展開の意識、即ち明確な意識・強化意識が必要である。

倉沢氏の講演は現代の国語教育におけるいくつかの問題点を指摘したものであった。ついで、

第二協議 国語能力を育成する実践的創造

最初に「国語能力育成とプログラム学習」という宮川利三郎氏の発表があつたが、これは研究発表というよりも、氏の実践を背景としたプログラム学習の紹介で、

・プログラム学習は現在の学習法（単元法まで）では学力が身につかないという事実から生まれたものであること。

・その特色は、

- 1 刺激↓反応↓強化という段階的学習である。
- 2 楽しく、やさしく、成功の喜びを得させる学習である。
- 3 自己学習である。

形式その他について、自ら実践しているがそれは今後の課題である。こう言われる氏には、昨年引きつづいて同一問題について発表する実践者としての自信の程がうかがわれた。

つづいて研究発表「作文指導の効率化」という杉江愛子氏（小）の小学校一年の作文指導についての実践的発表があつた。はじめに「先生への手紙」という形式で書かれた児童の生活を綴った事例（作品）紹介があつたが、紹介された作品はいずれも三年生程度ではないかと思われる表現力であつた。そのあと、本題について、そのためにはどうしたか、またどうすべきかの提案がなされた。

1 ひとりひとりの子どもの作文の成長過程をカードに書きこみ、この記録を次の担任に送る。（項目の立て方は適当に）

2 学校の年間計画に従い、計画的系統的な指導をする。(この結果、四月には短い文章が書ける。五月には接続語が使える。六月には句点が打てる。)

3 評価基準をつくるために全国的、地方別に同一規定による実態調査の具体化を計る。

4 単元の計画、指導方法など、子どもの活動や作品の分析をしなから、客観的な検討をする。

5 国語科の総合的、関連的な扱いをさらにくふうする。氏の発表はやゝ説得力に欠けて惜しかった。

研究発表のあと、講師の石森延夫氏からは、指導現象の①心象性——イメージすること、②機動性——その場その場で働けること、③一般性——教師だけでなく、生徒と共に考え、客観性をもつこと。これらの必要性が述べられ、西原慶一氏からは、文学的文章と論理的文章がそれぞれ情意性と論理性という性格をもつものであるから、それに応ずる指導をすること、石黒修氏からは、近代化ということは、現代の生活に適應できる子どもを育てることにあるなど指導助言がなされた。

おかれて問題の人、輿水実氏が来られ意見を述べられた。その要旨は、

近代化ということは、垣内松三郎先生から始まる。私は先生の考えを私なりに現代に適用したもので、先生が二十世紀前年の国語教育を進められたものとするなら、私はそれに基づいて、二十世紀後半の国語教育を考えたい。それは主題単元の強調ということ、技能性の強調ということである。近代化ということを出発したプログラム学習は小きぎみ学習に陥って文章全体をみるという立場から離れてしまっている。こういうプログラムではなく、スキルのプログラムでなくてはならぬ。これは近代化の一つの試みである。

氏の理論は今後いろいろな形で問題になりそうに思われた。午後は学校別に読解とか作文とか問題別に各会場に分かれ、こども、いくつかの発表が行なわれた。しかし、残念ながら、会半ばにして会場を去らねばならなかった。

以上まことに粗雑で全貌を伝えることができず、特に高校については本紙にあまり関係がないと思われたので、全面的に割愛したが、全般に或程度はその空気をお察しただけでないだろうか。昨年につづいて本年も参加してみても、やはり行ってよかつたなどの感を深くする。大会というものは——と、よく世間でいわれるように、とかくはなやかな面にとらわれて現実離れがし、得る所が少ないものであるけれども、現在における国語教育の方向や問題点をとらえるには、じかに感じられるだけに参加することは有意義なことだと思ふ。毎年あることだから是非明年からの参加をお勧めしたいものだ。

尚これはつけ加えであるが、この会の意向として、全国の国語研究団体相互の連絡を密にし、研究の交流を計りたいということであるから、本県の国語研究会についてもこの方向に沿って協力体制をもつようにしたいものだ。また、明年度の全国大会もできれば、各地域の研究成果を持ち寄るようなものにしたいたいの意見もあつたので、こういう点も幾分考慮して、県の大会を開くようにしたらどんなものだろうかと思ふのである。

聞くこと話すことの指導に教科書教材をどのように活用するか

昭和三十八年度中学校教育課程

研究発表大会研究発表要項

中部中学校 木村康男

一、教科書教材の受けとめ方

教科書教材には、その主たるねらいから大きく分けると三つの流れが考えられる。聞くこと話すことを主たるねらいとする単元と読むことを主たるねらいとする単元と、そして書くことを主たるねらいとする単元の三つである。教科書が、学習指導要領の意図のもとに校正された教材の集合体であると考えれば、A項に示される三つの内容が、そのまま教材の流れになることは当然のことかもしれない。

さて、問題は、その三つの流れをもつ教科書教材をどのように活用して、聞くこと話すことをどう指導するかということである。先ず、三つの流れの中にある聞くこと話すことを主たるねらいとする単元については、そのままの形で活用することができ。しかし、後の二つの流れについてはそのままの形で活用することはねらいがちがう以上無理がある。かといって、流れがちがうからということだけで聞くこと話すことと無関係だとして放置することは、それでなくとも系統性を欠きやすく、未組織部分の多い聞くこと話すこと分野をいっそうささってしまう危険がある。そして教材はすべて有機的なつながりをもっており、授業時には一つの活動は他の二つの活動の上に成立していることから結局は、読むこと書くことの単元についても何らかの形で活用していかなければ聞くこと話すことの指導が充分に達成できないこととなる。

私は、結論として、「聞くこと話すことの自答に教科書教材をどのように活用するか」という問題を次の二つの形で受けとめることにした。

- (1) 聞くこと話すことを主とする単元をどのように活用するか。
 - (2) 聞くこと話すことを主としない単元の中に聞くこと話すことの場合をどう作り、それをどう活用するか。
- 以下、こうした二つの受けとめ方をもとにして私が中学一年生を対象におこなってきたささやかな実践について述べてみたいと思う。

二、聞くこと話すことを主とする単元の活用

私が使用している教科書には、聞くこと話すことを主とした単元が5月、9月、1月の三ヶ月に配分されている。そしてその単元を継体の上から見ると、(一)「進んで話しあい」では話しあい(会議、討議)の活動形態が主となり、(五)「相手を考えて」では発表(報告)の活動形態が主となり、また(九)「心情にふれて」では朗読の活動形態が主となっている。四月以降私が実践して来た二つの単元の中で、ここでは(五)「相手を考えて」を取り上げて、「進んで話しあい」の発展段階としてどう指導したかを述べてみたいと思う。

(イ) 『相手を考えて』の教材構成

(1) ことわざについて（生徒作）

○ 研究発表のしかた

(2) 秋の電話

○ 電話の利用

(3) 十万ばのつばめを助けた話

この単元の中で、1：多数の研究発表、1：1の電話、1：多数の独話の三つの活動が考えられるが、次の理由で1：多数の独話を実際活動の中に取り上げることにした。

(a) 研究発表ということになると、研究題目、発表方法について手まど時間が必要以上にかかるが、独話の場合にはその点指導しやす

いし、また、独話の場合には、全員が同じ条件で参加でき、同じ条件の下に一せいに指導ができる。

(b) 「電話をかける」ことについては、設備の面で不十分であり、地域社会の必要度も少ない。

(c) 独話の活動を通して、秋の文化祭における「私の主張」大会への発展をはかれる。

そうして、残る二つの活動については理解するだけにとどめて、結局、この単元の前半を教材の(1)・(2)、電話のかけ方、研究発表のしかたと流し、後半を教材(3)を手がかりにして独話の指導までもっていき、その中で「電話のかけ方」や「研究発表のしかた」の中から必要なことをピックアップして利用するという計画に構成した。

(ロ) 単元の目標（前半省略）

(1) ことばづかいや話の組み立てを考えて、相手によくわかるように話す。

(2) ことばづかいや声の調子、話す態度をくふうして効果的に話す。

(3) 珍しい話、感動を受けた話、体験したことなど、話題を広く求めて、それぞれの場に適した材料を使って話す。

(4) 話をきいて、必要なことがらを確実につかむ。

(5) 他人の話をことばづかいや声の調子、はなす態度に注意しながら批判的に聞く。

(6) 話題、ことばづかい、話の組み立てをくふうしてわかりやすい文章（原稿）を書く。

(ハ) 単元の指導計画（前半第四次まで省略）

(1) 第五次Ⅱこれからの学習について話しあい、学習計画を立てる。(1)

(2) 第六次Ⅱ「十万ばのつばめを助けた話」を読んで話題のとらえ方、話の組み立て方を知る。(2)

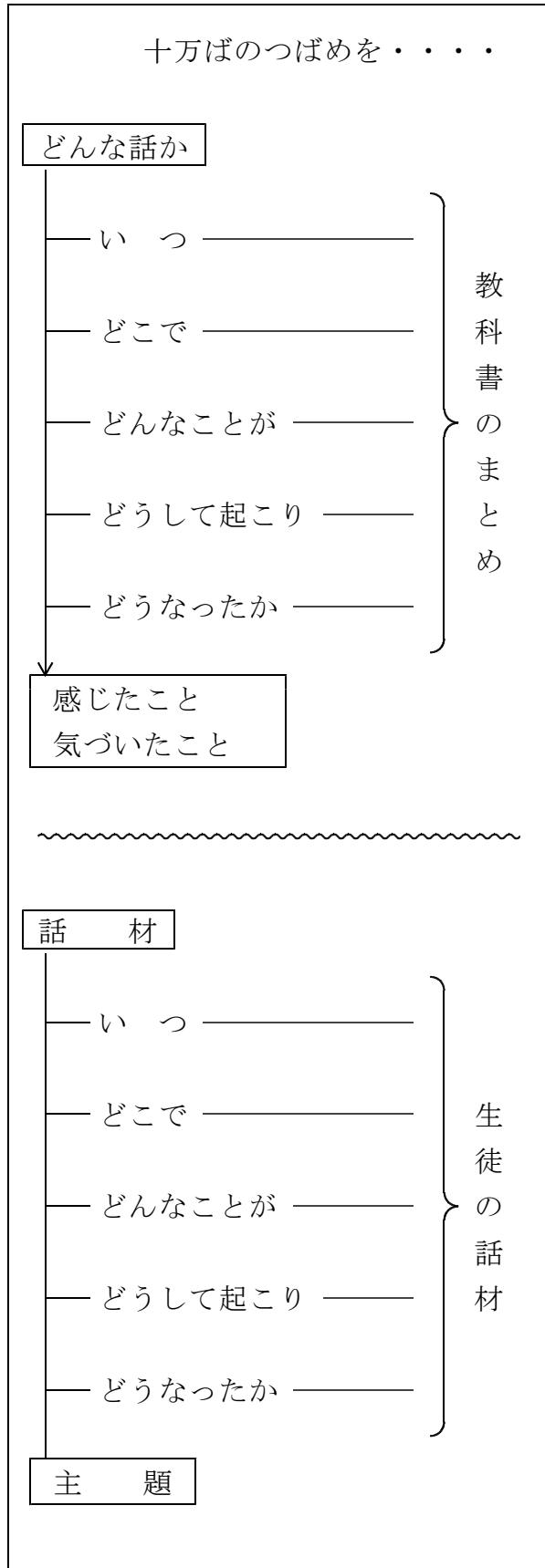
(3) 第七次Ⅱ「十万ばの話」を参考にして、主題を明確にし、それにふさわしい題材を選んで構成をする。(1)

- (4) 第八次Ⅱ発表原稿を作り、二・三人と交換して読み合い推考をする。(1.5)
- (5) 第九次Ⅱ「研究発表のしかた」を中心に、発表するについての態度、声の調子、ことばづかいなどについて話しあう。(0.5)
- (6) 第十次Ⅱ(1)二・三人でグループを作り原稿をもとに実際に独話してみる。(2)原稿の不十分なところを修正する。(1)
- (7) 第十一次Ⅱ全員が原稿をもとにして独話をし、全員がメモをしながら聞く。
- (8) 第十二次Ⅱ反省会を開き、生徒から司会者を出し、教師は記録をする。(1)
- 以上のように、後半は第八次の指導計画をたて実施をした。特に第八次目(全体の第十二次)の反省会については、二「進んで話しあいに」の発展的段階として計画した。

(二) 指導展開の実際

全一〇時間の展開を順を追って全て述べるといいのだが、紙数の関係で、それは省略させてもらって、ここでは第六次と第七次の学習活動と、第十二次の学習活動についてのみふれてみたいと思う。

「一」第六次の学習活動の中で、「十万ばのつばめを助けた話」の組立てを次のようにノートさせて、その構成がすぐ、自分の独話原稿の作成に役立つようにした。「どうして起りどうなったか」の部分の整理に多少の難があった。



〔二〕第十二次の学習の前の十五分で、(2)「進んで話しあい」の単元中会議についての簡単な復習をし、独話の批評会であると共に、「話しあいのしかた」の練習でもあることを確認させた。次に五分くらいで、自分の批評メモの整理をさせ、批評会の題を①話の内容について、②話しぶり音声態度についてと二つにしぼって話しあいを進めさせた。司会者は各クラス共級長が行なったが、司会者のもって行き方によって、話しあわれた内容の深淺はずい分あった。また個人の発言頻度については時間が正味三十分弱だったため少なく、約、三分の一が、聞くことだけに終始した。

〔六〕 反 省

全十時間の学習活動は、だいたい順調よく流れたが、尚次の点で再考を要するのではないかと思う。

(1) 話の原稿から独話活動への移し方について、改めてメモを作ることの可否。
(2) 全員が独話をし、聞くという活動の可否。私の場合に聞く態度は他人の話への興味のため良好だったが、メモを取る段階でやゝ困難を伴った。

(3) 話材を集め、構成するという原稿作りの段階で、話材と主題の関係がうまくとらえられない生徒があり、「書くこと」の指導の不足を痛感した。

〔三〕 聞くこと話すことを主としない単元の活用

「主としない単元」とは読むこと、書くことを主とする単元ということである。さて、そこで私たちは(2)と併せて、その単元の中に聞くこと話すことを指導する場をどう作り出し、どう活用するかについて考えなければならないと思うが、これを考えていくについては、先ず場をどうとらえていったらよいかの問題となる。

私たちが聞くこと話すことを主とする単元の活用を考えた時、そのために読むことをし、そのために書くことをし、この二つの上に聞くこと話すことの指導を展開した。と同じように考えれば読むことを指導する時には、聞くこと話すことと書くことの上に展開できるはずであるし、書くことについてもこれと同じことが言える。また教材というものが有機的総合的なつながりをもって構成され、教師と生徒の交流の中で展開される以上、その軽重はともかくとして、どの単元においても聞くこと話すことを指導する場は当然考えられる。

さて、指導の場をこうとらえた上で、次はどう活用して指導するかが問題になってくるが、これについては二つの面に分けて考えなければならぬ。その一つは「読むことを主とする単元を活用して、どう指導するか」であり、もう一つは「書くことを主とする単元を活用して、どう指導するか」である。後者については独話の原稿作りのところで少しふれたし、紙数の都合もあるので省略して、ここでは主として前者について実践したことを述べたいと思う。

(イ) 単元名 「読む楽しみ」

(ロ) 単元構成 (1) ビーチと算数 (2) 片耳の大しか

○ 解説文

(ハ) 聞くこと話すことを指導する場とその目標

(1) ビーチャと算数

a ビーチャはどんな人がらだろっか話しあう (学習の手びき)

二十五分

- ◎ 自分の意見を根拠をもって発表する。
- ◎ 他人の意見を尊重しつつ話しあう。

(2) 片耳の大しか

b あらすじをまとめて発表しよう (学習の手びき)

六十分

- ◎ 相手にわかりやすく順序だてて話す。
- ◎ まとまっているかどうかを批判しながら聞く。

c 感想発表をもとにして意見交換をする

六十分

- ◎ 他人の感想の根拠を確実につかみながら聞く。
- ◎ 他人の感想を尊重しながら、それに自分の感想を付加したり、
修正したりする。

d 朗読をする (三と四)

六十分

- ◎ 朗読のしかたをくふうして読む。
- ◎ 味わって聞く。

(二) 他単元との関連

a・cの活動は(2)「進んで話しあいに」の上に展開し、特に根拠をもって話しあわせることを主眼にした。bは読みの評価であると共に(4)「めあてにしたがって」の書く学習への発展と更に(5)「相手を考えて」の発表へ発展させようと考えた。dは(5)「相手を考えて」(6)「昔の物語」への発展と更に(9)「心情にふれて」の朗読へ発展させようと考えた。

(ホ) 実践の中から

「読むこと」を確実にしたり、深めたりするために「聞くこと話すこと」の学習を取り入れるという消極的な構え方から、その目標を明確にすることによって少しでも脱皮しようと努力した結果、必要なことばで話すことや、他人の感想や意見に対して自分の感想や意見を発表することや、話すためには聞くことを充分しなければならぬことなどの基礎的なものが徐々に実際活動を通して身につけていくことは収穫であった。

例えば感想の発表にしても、メモ原稿を作ることによって、漠然と発表するよりも高められたし、話しあいにしても、応用的な場面を経験することによって、前単元の基礎の上につきかさができたのだと思う。

併し、まだ話し合いに積極的に参加できない生徒が五分の一くらいある。従って、五分の四の生徒の技能は高まって、参加できない生徒の技能の高まりはあまりないので、私は隣り同志で話しあった後で全体へ参加するという二段構えの方法をとることで全員参加をめざしている。尚、将来はグループ討議も考えていきたいと思っている。

〔四〕 結 び

「聞くこと話すことの指導に教科書教材をどのように活用するか」という問題に対して、私は二つの流れに分けて述べて来たが、実践が貧しくて充分いつくせていないと思うし、また、私の述べたことの中に、まだ幾多のものがあることと思う。が、とにかくむずかしい問題だと傍観していた時よりも、はるかにそのむずかしさが具体的になったし、整理されてきていて今後への手がかりがつかみやすくなったと思っている。そして、もう一つのプラスは、この研究を通して、全ての授業形態の中に聞くこと話すことの領域を組織的に位置づける必要をさとしたことである。今まで未組織に行きあたりばったりに利用されていた「聞く話す」がはっきりと授業時に位置づけることによって聞くこと話すことの向上ばかりでなく、他の二つの活動も深化発展するのではなからうか。

私が以上述べてきたことは、一年生の教科書教材からあまり発展を示さず、また未組織にころがっているいくつかの活動にまでいたっていないが、今後の実践の中で、できる限り取り入れて組織し、発展をさせたいと思っている。

プログラミング学習から

何を学んだか

片山利秋（加納中）

プログラミング学習の研究を手がけてから二年になる。プログラミングということばにもすっかり慣れて、プロといえればプログラミング学習のこととお互いの間にもスムーズに通ずるようになって、運動会のプログラムなどの時にかえって説明をつけねばならぬこの頃である。

昨今、プログラミング学習に対する関心は教育界全体に大きく広まり、教育雑誌なども殆んど全部がこの問題について論じており、一種のブームのようにも思われる。時々、プログラミング学習の成果についてもたずねられることがあるが、これだけの結果が・・・とはつきりした数量であらわし難い。教育の成果とはなかなかはかりにくいものであり、プログラミング学習そのものも、研究途上のものであって、この指導にはこのプログラムでという決定版はない。プログラミング学習の確立は二十年かかると、研究者の間でよく言われるが、新しい方法がでてくると、すぐその成果を問題にしたがるというわれわれの態度も考え直す必要がある。新しい方

法だからとか珍しいからとかというのではなく、生徒の能力をつけるのに有効であるから、現在の指導の欠陥を除去するものであるからという観点から取り上げなければならぬと思う。プログラミング学習に関する賛成論反対論をできるだけ目を通して見たが、賛成論の中には、その長所を誇大に書きたてるあまり、他の学習形態が全くつまらぬような印象を与えるものもあるし、反面、反対論の中にはプログラミング学習の欠点をこれまた誇大にかつ感情的とも思われるくらい攻撃するものもある。これらは公正な批判からはずれ、批判のための批判であって、教育発展のために惜しむべきことであると思う。失礼な言い分になるが、国語教育の権威とか、理論家とか思われている人にそういうものが多いのはどうしたことだろうか。食べないで味を批評することはできない。プログラムを見ただけでは本当の批評はできないのではあるまいか。まず食べてみるのがたいせつである。そういう意味において、賛否は別として、われわれの研究は、現場こそっともよい研究の場であり、毎日の授業、生徒の動きをもっと見つめなければならぬというの、この研究を通して痛感したことの一つである。

プログラミング学習では、生徒の学習への参加・細かいステップとということ強調する。このステップの細かさについては賛否両論わかれるところであるが、われわれの日常の学習指導の中では、

どちらかといえば段階が大まかすぎるのではなからうか。段落に分けるといふこと一つを考えても、通読したらすぐ段落に区切るようなことは特別分かりやすいものは別としてなかなか容易なことではない。それまでのいくつかの段落をたどらなければならぬ。プログラム学習では一つのセンテンスで多いときは五つも六つもステップを作成する。一ページにもみたぬ文章で百いくつかのステップになる。このようなシートのプログラム学習を毎時間実施することは到底できることではない。しかし、このステップを細かくすることは、一斉学習の場合でも、生かされるし、発問に対して生徒がわかりにくそうな顔をしている時、すぐそれに応じて来ない時、そんなとき、ステップが大きかったということがちらつと頭をかすめる。そして、発問をやり直す。ここにもプログラム学習の収穫がある。

生徒の能力を高め、思考力を養うために授業をしながら、やはり教材を教師の力で展開し、どう与えていくか、どう流していくかという点に重点がおかれやすく、生徒の思考、生徒の行動が従になるという弊に陥りやすいものである。それに対して、プログラム学習の強調する個別学習、個々のドウイングなどの考え方はとかく計画に追われ、教材をスムーズに流すという考え方から、生徒が何をなすのか、どういう順序でやっていくのかという、生徒の動きを中心にして国語教育を実施していこうとする考えにたせるものである。

これらのものはプログラム学習の研究実践の中から得たものであるが、もちろん、この学習が万能であって他のものを認めないという考えは毛頭ない。やはりいろいろな障害もあり、検討の余地もある。学習とはどういうものであるかということを感じようぶん考慮してより科学的な指導の方法を見つけていきたいものである。

事務局だより

—— 当会の名称を改めました ——

従来当研究会は岐阜県中学校国語教育研究会と呼んでいましたが、県下での教科でも、岐阜県中学校社会科研究会、……音楽科研究会と、呼称が統一されましたので、当会も岐阜県中学校国語科研究会と改めました。そして、各教科の研究会総合団体として、岐阜県中学校教科研究会が発足し、会長には伊奈波中学校長林弘司先生をお願いすることになっていきます。

—— 研究助成金について ——

昭和三十八年度の助成金は七万円と決定しました。この助成金は研究大会開催に要する経費などに支出されるはずで。

あとがき

△ みなさんあけましておめでとうございます。

当研究会が発足して、あしかけ三年になります。ようやく一人歩きが出来る年になりました。今年こそは、自分たちの手で自分たちの会をより立派に育てたいものです。みなさんがたのご協力をお願いいたします。

△ 会報たいへんおそくなりました。ほんとうにすまないことと申っています。事務局の怠慢をお許しくください。

△ 原稿をどんどんお寄せください。みなさん方のお声をお待ちしています。

事務局 千種